

---

# インフィニット・ストラトス 原作破壊者の物語

railgun731

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 原作破壊者の物語

### 【Nコード】

N0773S

### 【作者名】

r a i l l g u n 7 3 1

### 【あらすじ】

ごく普通の毎日を送っていた中学3年生の人間、松下当麻。今日は高校入試の日、会場の高校に行ったはずだったが、彼が居たのはIS学園だった！？一夏と完全に同じ境遇の人間の話です。

自分の執筆中小説「魔法少女リリカルなのはStrikers 中途半端な能力が手に入った」はしばらくお休みとさせていただきます。誠に勝手ですが、ご理解のほど願います。

この作品は作者の完全なる自己満足であり、オリ主、ご都合主義等の要素が嫌いな方は読まない事をお勧めいたします。

## プロローグ（前書き）

作者はこれが2度目の投稿です（前作は無期限休止とさせていた  
いております）。

しかしいまだに文才は無く、ご都合主義満載の小説となっており  
ます。

そういったものが嫌いな方は、ブラウザバックをお勧めいたしま  
す。

それでは、「インフィニット・ストラトス 原作破壊者の物語」  
はじまります。

## プロローグ

「どうして俺は・・・こんなところに来てしまったんだろう・・・」

俺は松下当麻。高校の入試の日、藍越学園と間違っ て IS 学園に行っ てしまった人間である。

俺が受験するはずだったのは藍越学園。学費が安い上に就職後の進路までケアしてくれるという素晴らしい高校である。

何故学費が安いかといえば、卒業生の進路の九割が学園法人の関連企業に就職するからである。これで私立ってどういうことなの？

・・・とまあ前置きは終わりだ。今俺が居るのは、藍越学園ではないのだ。IS 学園。女性にしか使用することのできない「インフィニット・ストラトス」の操縦者を育成するための学校である。

何故女にしか使えない IS の育成校にいるか。それは俺が、IS を起動させてしまったからである。

## プロローグ（後書き）

作者は今年より受験生のため、更新が遅いとかいうレベルじゃなくなってきました。

元から更新は遅いですが。

また、原作が未完の為、原作と合わないところ等あると思いますが、そこはこの作品のオリジナル設定としてお受け取りください。

**第一話 IS学園入学、そして同じ馬鹿との遭遇（前書き）**

出来る限り頑張っていけますので、よろしくお願いします！

## 第一話 IS学園入学、そして同じ馬鹿との遭遇

何故俺がIS学園にいるのか、それはさっき言った通りISを起動させてしまったからである。

ここでIS インフィニット・ストラトス について、軽く説明をしておこう。

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツである。しかし宇宙開発が一向に進まず、それは「兵器」となり、各国の思惑により「スポーツ」へと変わった、まあ飛行パワードスーツのようなものだ。一見完璧に見えるようなISにも欠点はある。それが、

「女性にしか扱う事が出来ない」

というものである。男がISを使おうとしても反応しない。よって今の時代はISを使える女が立場的に強く、使えない男は弱い、女尊男卑へと世界は変化していった。

と、こんなところだろう。

で、俺がどうやってISを起動させてしまったかだが、それは簡単である。

受験日に藍越学園に行こうとした 間違っつてIS学園に行ってしまう 会場に置いてあったISに触れる IS起動・・・というわけだ。

男がISを起動するって言うのはまずあり得ない事だったから、俺は即刻IS学園に入学させられる事になった。

で、今俺が居るのは入学式直後のIS学園1年1組。何と俺以外にもISを起動した男がいた。

そいつの名は織斑一夏。恐ろしい事に、俺と同じ理由、つまり藍越学園を受験しようとしたら以下略 ということだった。

「……くん、織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

あ、今SHRだったか。ちょうど俺の前の席の奴 織斑一夏 が副担任の山田真耶先生に自己紹介を促されている。

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな、ダメかな?」

……色々と凄い先生だ、この人本当に教師なんだろうか……? 背も生徒とほとんど変わらないし、しかもでかい服きてるから余計小さく見える。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……えー、えっと、織斑一夏です。宜しくお願いします。」

……周りに来てるぞ、「まだ終わんないよね?」的な視線が見せて貰おうか、織斑一夏の性能とやらを!

「以上です」

紹介・・・終わりかよ！

しかもずっとこけてる女子が数人いるな・・・俺次だぜ？父さん・・・  
僕どうすればいいんだ・・・

と、次の瞬間。

パンツッ！

アイツの頭に、出席名簿の一撃が入った。

「げえっ、関羽!？」

Bannon!

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者。」

す、すげえ威力だろうと思わざるを得ないな・・・誰なんだ・・・？  
このIS学園と、何か関係があるのか・・・

で、その後の紹介により、織斑を殴った(？)のはこのクラスの担任である、織斑千冬教諭であることが分かった。だが今の俺にはそんな事どうでもいい、問題は

「じゃあ次・・・松下当麻くん？自己紹介してください。」

という山田先生。何故だろう、俺は『ま』なのにどうして『お』の後ろの席なんだろうか。

仕方が無いので立ち上がる。

「えー・・・松下当麻です。よろしく・・・」

そしてまた俺に降りかかる視線！援護は！そういつまでも持たないぞ！

「特技って言えるものは特にないです・・・以上です。」

また女子数名がずっとこける音。さっきよりは少なかったようだが。

SHRが終わり、休み時間。IS学園は入学式の日でも授業があるらしい。

俺はとりあえず前にいる織斑に話しかける事にした。

「おい、ちょっといいか？」

「ん？ああ、確か松下、だっけ？」

「ああそうだ。当麻って呼んでくれ、堅苦しいの嫌いだな。」

「じゃあ俺も一夏でいいよ、俺もそういうの嫌いだ。」

「オーケー。聞いた話だと一夏、お前も監越志望だったんだってな？」

「お前もだったのか。で、」

「間違っってここに来たと」

「プツクク・・・」

これは俺。

「ク、クク・・・」

「アーツハツハツ!!!」

俺はこの時思った、しばらくこいつと話さない日はないだろうと。

第一話 IS学園入学、そして同じ馬鹿との遭遇（後書き）

凄いggdggdになっちゃった感じが満載ですが・・・  
申し訳ない！次は頑張ります！

第2話 VS代表候補生！？そして・・・（前書き）

投稿が遅くなり誠に申し訳ございませんっ！

## 第2話 vs 代表候補生！？そして・・・

ふあゝ、しっかし。

「本当に女だらけだよなあ・・・」

見るよ、1-1教室に張りつく女子の数。まあ女子校だから仕方ない。今は違うけど。

あ、一夏？アイツは、えーっと確か篠ノ之だったか、どうやらそいつが幼馴染らしくどっかに連れてかれたぞ。

まあ、授業開始までには戻ってきたが。

さて次の時間。

その間にセシリアとかいう代表候補生に絡まれたりもしたが・・・んで授業内容は織斑先生によると、どうやらクラス代表を決めるらしい。

自薦、他薦は問わないって・・・ええそうです、俺と一夏が凄いや数の推薦を頂きました。

だがそれを良しと思わん者もいたみたいだ。

「納得がいきませんわ！」

そう言ったのはさっきのセシリアっつー女子だ。

「そのような選出は認められませんっ！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

この私、セシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか!？」

セシリア・オルコット・・・言うよね。

「実力から申せばクラス代表が私である事は最早必然。私はIS技術の修練の為にこのような極東の島国まで来ているのであって、決してサーカスをしに来たわけでは　「おいちよつと待てコラ「え?」

ここまで日本を馬鹿にしゃがるとはなあ・・・!

「もう我慢ならねえ!口を開けばどいつもこいつも極東の島国だぬるま湯だかほざきやがる!日本馬鹿にすんな日本を!日本から生まれたものがどれだけ今世界で機能してるかわかってんのか!?それに比べなんだ!イギリスにお国自慢あるか!?まずい料理くらいしかねーんじゃねーのか!？」

「な、何を仰いますの!?!我が国にだっておいしい料理くらいありますわ!ああもう面倒な・・・!」

「決闘だ(ですわ!)」

「ふ・・・お互いの意見が一致したな・・・おい、日本代表もう一人!織斑一夏!」



「あ、はい・・・」

話？専用機が支給される・・・と思うんだが、その話だろうかね。

「それでは授業を始める、教科書39ページを開け！」

その後。

「松下、正直に言おう。お前には今、ISが無い。」

え？専用機無いの？その事を聞いたら、

「織斑はともかく、お前の分を準備するにはまだ時間がかかるそう  
だ。」

「そんな・・・馬鹿な・・・っ!？」

俺は頂垂れる。だってそうだろ？

カラン

「ん、松下、何か落ちたぞ。」

「え、ああ・・・」

俺が落としたのは、青を基調としたフレームに緑色の翼が生えたよ  
うな感じのペンダントだ。

「親の形見でしてね。俺が9歳くらいの頃に、飛行機事故で・・・」  
「そうか・・・」

と、織斑先生の視線がさつき落としたペンダントに注がれる。

「どうかしたんですか？」

「あくまでこれは私の勘だが・・・それはISのような気がする。」

え？何この人、見ただけでISってわかるの？

「つてええええ！？」

「大声を出すな馬鹿者・・・それを渡せ、ISかどうか調べる。」

命令系つか・・・ま、確かに無いよりは可能性に賭けるべきか。

「わかりました・・・出来れば早めに」

「ふ、明日には返すぞ。」

第2話 VS代表候補生!?!そして・・・(後書き)

次の話では、当麻のISについての話になります!

### 第3話 当麻のIS（前書き）

当麻のISと過去にまつての話です。

### 第3話 当麻のIS

俺が織斑先生にペンダントを預けた次の日。

職員室に呼び出し喰らったでござるの巻。

「ああ松下、喜べ。」

「喜べって……何をです?」

「アレは、ISだ。」

え?アレIS?あのペンダントが……?

「ってことは……」

「ああ、これもお前に返そう。ISを使用する上での規則、覚えて  
いるな?」

「確かあの電話帳みたいな感じの奴ですよな?でもあれ確か専用機  
に関しては……」

「そうだ、だからこれは、私からのプレゼントだ。」(ドサッ

……流石兵器であるIS、規則も半端ぬえ。

「それはともかく、私についてこい。話がある。ここでは出来んレ

ベルの話だ・・・」

IS学園の地下室。相当なレベルの秘匿事項を話す時にでも使うの  
だろうが、厳重な防音が施されてある。

「・・・松下、これを見る。」

織斑先生が指さしたディスプレイを覗き込む。そこには、

```
IS  name:OO  
1st form:Over Flag 2nd form:OO/O  
ORaisar Finalform:?????  
.....
```

そこに書かれていたのは、俺の - さつき先生が俺のものだと言った  
- ISの、情報だった。

んと・・・名前がダブルオー、1次形態オーバー・・・フラッグ?二  
次形態ダブルオー、ダブルオー・・・ライザー?んで、ファイナル  
フォームが不明。

後は1次形態時の武装とか。ここでは書かないが。

「・・・今のお前には理解できんだろうが、これは相当な力を秘め  
た代物だ。扱うには、覚悟が必要になる。・・・その覚悟が、お前  
にはあるか?」

「……自信とか、覚悟なんてない……俺はただ、このIS学園を……守りたい……だけなんです」

「フツ、何から守るのかは謎だが……まあいい、これを持って行け。それとお前の家族の事を少し調べさせてもらった。」

「そうか。まあ、親の形見がISつっぴーのものな。」

「いいですよ、話します……まあ、俺の知る範囲ですが。」

俺の両親は、ISの開発工場で働いていた。母は一時期、篠ノ之東の元にいたこともあったらしく、何機かコアを製造していた。

両親が死んだのは、俺が9歳の時。両親が勤める製造会社の発表会に人手が必要で、2人とも会場に向かっていた。そこへ移動する際の飛行機が墜落。2人とも病院に運ばれたが、間もなく死亡した。死の間際母は、俺にあのペンダント……ダブルオーを託した。

「成程な、それなら私の推理とも矛盾しない。」

私は恐らくそのダブルオー、発表会に出典するつもりだったと考えている。あの時出たのはく打鉄・うちがね・>だったが、サプライズとしてダブルオーの稼働システムでも発表するつもりだったのだろうな。

ダブルオーはあまりにも他のISと違いすぎる。全く、そいつが発表されてなくて助かった。」

「そんなに変わってるんですか？このダブルオーは。」

「1次形態はともかく2次形態が異常だ。まずは推進力及びエネルギー」

ギーだ。普通のISはお前の知る通りだが、ダブルオーの場合、どうやら特殊な粒子を排出、それによって推進力を得ている。また、その粒子を圧縮することで武装にも生かしているらしい。さらにその粒子を生産するもの、太陽炉にも問題がある。」

太陽炉・・・

「まず太陽炉が1つあるだけで、安定した粒子生産ができ、迂闊な事をしなければ半永久的に活動ができる。シールドエネルギーは共通しているがな。」

「半永久的に活動!?!」

「ああ・・・しかもダブルオーの場合、その太陽炉が2つ搭載されている。これによりエネルギーは2倍ではなく、2乗になるらしい。」

「それって・・・」

「ああ、チートだな。」

「いやいやいや、確かにそうですけど」

「だが、問題もある。2つの太陽炉が、上手く同調しないと安定した粒子生産が出来ない。そのためのシステムもあるらしいが、そこは自分で探せ。」

んーと・・・

「つまり、そのシステムを起動しないとほぼ欠陥機・・・ってこと

じゃないんですか・・・？

「ああ、その通りだ。」

おいおい・・・大丈夫なのかよ・・・？

「ま、後は自分で調べてみるがいいさ。」  
「コシコシ

・・・せつせつ。

### 第3話 当麻のIS（後書き）

当麻のISは完全にダブルオーガンダムです。はい。言い訳はしません。

それと次回も更新が遅くなりそうな予感が……申し訳ないです。

## 第四話 夢か、現実か。当麻の過去（前書き）

申し訳ありません、今回は超展開です！

自分の文章力ではダブルオー系列1本で書くのは辛そうだと判断いたしました次第でございます。

#### 第四話 夢か、現実か。当麻の過去

「さつて・・・と。」

俺は「ダブルオー」の解析を始めることにした。

一次形態までは楽に解析できたんだが・・・

「何だこれ・・・理解できんぞ、天才の篠ノ之博士でもわかるのかこれ」

意味不明な言葉の羅列。GNドライブ、GN粒子。

あ、やべえ。眠い。幸い明日は学校が・・・いやあるな。どうしよう。

遅刻は必至じゃねえのか・・・

俺の意識は闇に落ちた。

「ん・・・」

俺は目を覚ました・・・はずなんだが、ここはどこだ？

俺はさっきまで自分の部屋で、借りた機材で解析を・・・

「あー心配いらないよ、これ夢だから。少なくとも君の中ではね。」

聞いた覚えのない声が聞こえる。

その声の主は、俺の目の前に姿を現した。

20代後半らしき男。服装は黒のジーンズに薄紫のYシャツ。

「僕はラファエルと言ってね。これでも天使だ。さてここで問題、何故僕は君を呼んだんでしょうか？」

「呼んだ・・・だと？どういう事だ？」

「君の過去を、そろそろ教える必要があると思った人がいてね？君たちで言う神様かな？」

「神・・・？冗談はよせよ？」

「信じてないのか・・・なら、これを見たまえ。」

そうして奴・ラファエルだったか・はある映像を見せた。

その映像に映っていたのは、俺だった。

だが見覚えの無い場所。見覚えのない人たち。

「これは君の＜本当の過去＞だ。実は君は以前死んでいてね。しかも死因が寿命管理業の神様のミスと来た。だから最高神は君に何も言わずに、ある世界に、君を送り込んだ。それが今君が住む世界。」

映像では、俺が子供を庇って車に撥ねられている。

「何でその事を言わなかったんだ？」

「神の気まぐれ、って奴じゃないかな？それは流石に最高神の考えだから僕には口出しできない。」

「・・・大体は分かった。だが、何故俺を呼んだんだ？」

「君の過去の記憶を元に戻すため、そして＜力＞を与えるため・・・」

「なに・・・？」

「大丈夫、キミが夢から覚める頃には戻ってるさ。と言っても一部だけだね。流石に全てを戻す事なんて出来ない。」

さらにアイツは続ける。

「ま、転生時の記憶は確実に残ってるから安心してね。後君が僕達

神や天使と会う事は二度と無い。・・・じゃーね?」

「!?!」

・・・朝だった。凄く眠いが。

「アレは本当に夢だったのか・・・?」

俺の中では、どうしてもあの夢が引つかかる。

「そっだ、今日も学校か。そっいや織斑先生にダブルオーのデータを提出するんだっけ。」

そっ言いつつ何気なく、ダブルオーの解析ページを開く。

「第二形態までで大丈夫だよな・・・!!?!」

俺は驚いた。何故なら。全てデータが、変わっていた。さらに俺の頭に流れる情報のような妙な感覚。

「・・・初期形態選択可能、但しG1に限る・・・?」

第四話 夢か、現実か。当麻の過去（後書き）

すみませんわけわからない文章になってます・・・  
新しい設定は全て、次の話にて説明いたします。

## 設定 1

元々の当麻専用IS：ダブルオー

一次形態：オーバードラッグ 武装：リニアライフル プラズマソード 機銃 ロケットランチャー

二次形態：ダブルオーノダブルオーライザー

武装（ダブルオー時）：GNソード

ド？ GNビームサーベル GNシールド

武装（ダブルオーライザー時）：

上記+GNソード？ GNミサイル

三次形態：不明

IS世界の当麻の母親が開発した第三世代に匹敵するIS。篠ノ之束の協力もあって制作された。

GN粒子など偶然によって発見された（極秘扱い）動力等を使用している。

現在の当麻専用IS：名称未決定

一次形態：当麻の記憶に存在する >MS< と呼ばれる機体内の、>  
グレード  
G1< に属する機体を当麻自身が選択する。性能は打鉄とほぼ同じ。

二次形態：>G2< に分類される機体から選択する。性能は「ダブルオー」と同じか、それ以上である。

三次形態：>G3<に分類される機体から選択。ただし初期段階では三次携帯は完全なブラックボックスである。

神の力と当麻の記憶によつて完全に稼働させることのできるIS。

機体選択は性能の違いによつては選べない機体もあるが、前世の当麻の記憶によつて最強のオールラウンダーISとなる。

さらに単一仕様能力>ワンオブ・アビリティ<は変化した機体によつて異なる。

だが短所もあり、一度起動して選択した機体は再び解除、起動させない限り変化出来ない。

ただし機体そのものに換装機能がある場合は換装できる。

## 設定1（後書き）

なんかもう某ソードマスターヤマト並みの稚拙さですが・・・  
宜しく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0773s/>

---

インフィニット・ストラトス 原作破壊者の物語

2011年10月8日02時55分発行